

42315

教科書文庫

|                |
|----------------|
| 4              |
| 815            |
| 42-1933        |
| 20000<br>35400 |

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

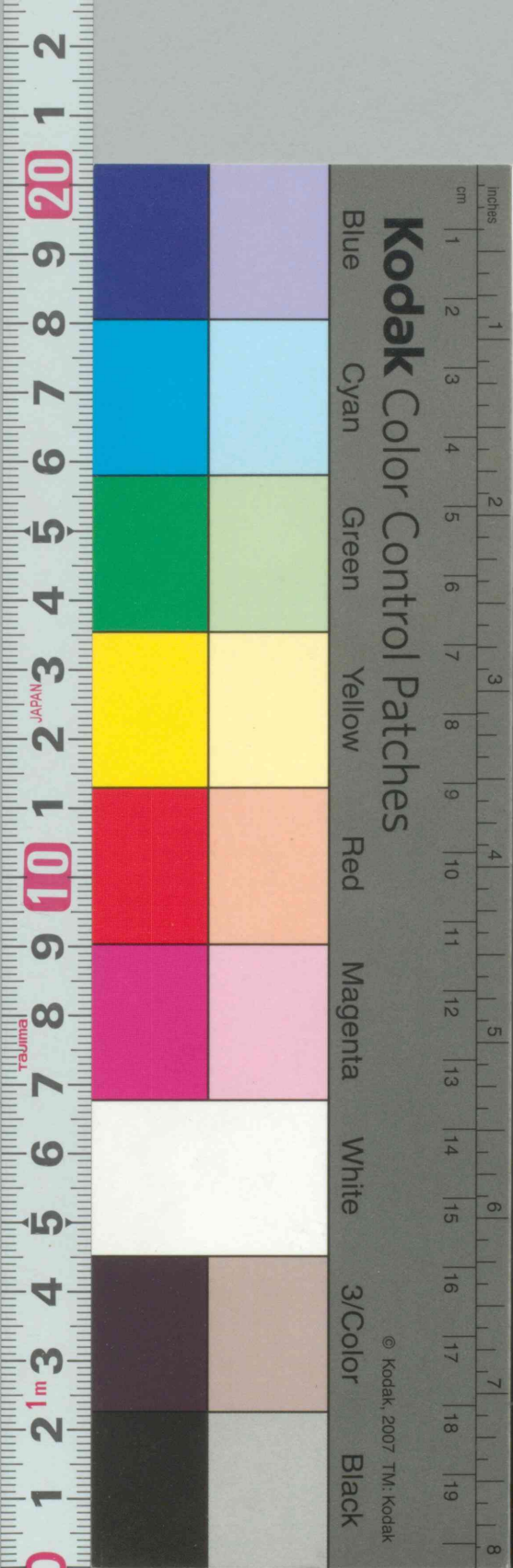


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫  
4  
815  
42-1933  
2000035400

訂改女子國文典

金





教科書文庫  
4  
815  
42-1933  
2000035400

濟定檢省部文  
科語國校學女等高 日二月二十年八和昭

訂改  
女子國文典  
全



廣島高等師範學校  
附屬中學校  
國語漢文研究會著

阪大・京東  
版藏店書極京

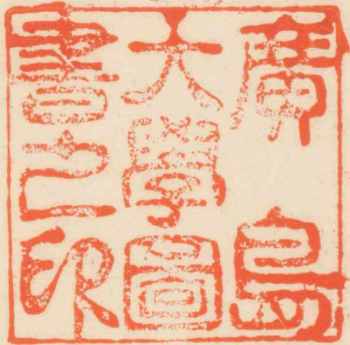
広島大学図書  
2000035400  


資料室

375.9  
H118

二  
斤  
白  
砂  
布  
子





例言

- 一 本書は高等女學校並びに之と同程度の女子中等學校の文法、科教科書として前に編纂した女子國文典を改訂したものである。
- 一 理論よりも實際を重んずるが故に、例文によつて歸納的に了解し得るやうにつとめ、煩雜な説明は之を避け、且つ練習題を相當多くした。
- 一 練習題は特に意を用ひ、平易を旨とし、大部分尋常小學國語讀本中から之を採つた。
- 一 文語文法を基礎として口語文法を説くのがすべての點に於て便利であるから、動詞、形容詞、助動詞、助詞の如き、先づ文語文法を説き、口語文法を之に併せ説くことにした。



- 一 品詞の概念を與へた後、主要な品詞の詳説に及ぶのが自然であると思ふが故に今はそれによつた。
- 一 動詞は六つの活用形を知つた後其の活用の種類を説くのが便宜であるからそれに従つた。
- 一 動詞と助動詞との接續は、動詞の活用形による分類が一旦の記憶には便であるが、實際の應用には助動詞の一々について記憶するが便であるが故にそれに従つた。
- 一 助詞は文語口語對比の用例を主とし、極めて必要なもののみ説明を加へた。
- 一 初學者には最初から各單語を區分することが困難であるから、單語篇上の練習題では、各單語毎に一字あけて其の練習を容易にした。

昭和八年六月

著者識

# 訂改女子國文典 目次

總説.....一

## 第一篇 單語篇上

|     |     |       |    |
|-----|-----|-------|----|
| 第一章 | 名詞  | ..... | 二  |
| 第二章 | 代名詞 | ..... | 六  |
| 第三章 | 動詞  | ..... | 一〇 |
| 第四章 | 形容詞 | ..... | 三  |
| 第五章 | 助動詞 | ..... | 四  |
| 第六章 | 助詞  | ..... | 九  |
| 第七章 | 副詞  | ..... | 三  |

目次



第八章 接續詞 . . . . . 四  
 第九章 感動詞 . . . . . 七

第二篇 單語篇 下

第一章 文語動詞の活用形 . . . . . 九  
 第二章 文語動詞の活用の種類 . . . . . 壹  
 一 四段活用 . . . . . 壹  
 二 上二段活用 . . . . . 壹  
 三 上一段活用 . . . . . 貳  
 四 下二段活用 . . . . . 貳  
 五 下一段活用 . . . . . 参  
 六 カ行變格活用 . . . . . 参  
 七 サ行變格活用 . . . . . 参

八 ナ行變格活用 . . . . . 四  
 九 ラ行變格活用 . . . . . 四  
 第三章 文語動詞の識別法 . . . . . 四  
 一 活用の種類を識別する法 . . . . . 四  
 二 活用の假名遣を識別する法 . . . . . 四  
 第四章 口語動詞の活用 . . . . . 七  
 第五章 形容詞の活用 . . . . . 五  
 文語形容詞 . . . . . 五  
 口語形容詞 . . . . . 五  
 第六章 用言の音便 . . . . . 五  
 動詞の音便 . . . . . 五  
 形容詞の音便 . . . . . 五



第七章 文語助動詞の種類及び活用

|    |        |   |
|----|--------|---|
| 一  | 一時の助動詞 | 六 |
| 二  | 受身の助動詞 | 六 |
| 三  | 可能の助動詞 | 六 |
| 四  | 使役の助動詞 | 六 |
| 五  | 崇敬の助動詞 | 六 |
| 六  | 推量の助動詞 | 六 |
| 七  | 打消の助動詞 | 六 |
| 八  | 指定の助動詞 | 六 |
| 九  | 咏嘆の助動詞 | 六 |
| 一〇 | 願望の助動詞 | 七 |
| 一一 | 比況の助動詞 | 七 |

第八章 口語助動詞の種類及び活用

|    |        |   |
|----|--------|---|
| 一  | 一時の助動詞 | 六 |
| 二  | 受身の助動詞 | 六 |
| 三  | 可能の助動詞 | 六 |
| 四  | 使役の助動詞 | 六 |
| 五  | 崇敬の助動詞 | 六 |
| 六  | 推量の助動詞 | 六 |
| 七  | 打消の助動詞 | 六 |
| 八  | 指定の助動詞 | 六 |
| 九  | 願望の助動詞 | 六 |
| 一〇 | 比況の助動詞 | 六 |

第九章 助動詞の接續

|            |   |
|------------|---|
| 動詞と助動詞との接續 | 六 |
| 助動詞相互の接續   | 六 |



第一〇章 助詞の用法附係結の法則

はがの……………六  
 をにへ……………六  
 ともよりまでにては……………七  
 ともども……………七  
 つてだにすらさへ……………九  
 のみばかりかなばやなよぞなむ……………九  
 やかこそ……………一〇  
 係結の法則……………一〇  
 第一章 接頭語・接尾語……………一〇

第三篇 文章篇

第一章 文の成分……………一〇

主語・述語……………一〇  
 補語……………一〇  
 修飾語……………一一  
 獨立語……………一三

第二章 文の成分の位置及び省略……………一四

一 正常の場合……………一四  
 二 倒置の場合……………一五  
 三 省略の場合……………一五

第三章 文の種類……………一八

單文……………一八  
 複文……………一九  
 重文……………二〇



附録 文法上許容ニ關スル事項

表

- 一 文語動詞活用表
- 二 口語動詞活用表
- 三 文語形容詞活用表
- 四 口語形容詞活用表
- 五 文語助動詞活用表
- 六 口語助動詞活用表



訂改 女子國文典 全

總 說

庭の櫻がきれいに咲きました。

右の例のやうに、一つのまとまつた思想をあらはしたものを文といふ。

文は、これを分解する時は、右の傍線を施した部分のやうに、それぞれ一つの意味又は働きをもつた單位に分かれる。かやうな言語の一單位を單語又は語といふ。庭の櫻咲きましたのやうに、いくつかの單語が集まつて一つの

單語

文



句

品詞

意味をなすものを句といふ。單語を其の意味・働き・形等の上から左の九種に分ち、その各を品詞といふ。

名詞 代名詞 動詞 形容詞 助動詞 助詞 副詞  
接續詞 感動詞

第一篇 單語篇上

第一章 名詞

一 富士は水彩もて畫がける繪の如く、窓の右に立ちまた左にあらはる。

二 紫式部は平安朝時代の才女である。

名詞

右の例の傍線を施した語のやうに、事物の名稱をいふ語を名詞といふ。

固有名詞

名詞中の右の二重線を施した語のやうに、人名地名等をあらはすものを固有名詞といふ。

數詞

又左の例のやうに、事物の數量又は順序をあらはす語は、特に數詞と呼ぶことがある。

一 四と五との和は九なり。

二 鉛筆一ダースの價三十錢なり。

三 前列の右から第二番目のが私の机です。

練習

次の文中から名詞を選び出し、固有名詞・數詞は特に指摘しな



- さう。
- (1) 松江を發したる汽車は風光繪の如き宍道湖畔を走れり。
- (2) 藍白赤の三色を以て染め分けられたるはフランスの國旗なり。
- (3) 間宮林藏は幕府の命によりて、松田傳十郎と樺太の海岸を探検せり。
- (4) 東大寺の金堂は天空高く聳えて、五丈三尺の大佛千二百年の面影を残せり。
- (5) 麓の川を白帆が三つ四つ通つてゆく。
- (6) 怒と失望と後悔とに身も魂もくだけ果てた。
- (7) 調子のよい蜜柑探歌がすみきつた晩秋の空気を

ふるはして、のどかに聞えて来る。

- (8) 二番目の弟は十歳で、三番目のは五歳です。
- (9) 日本では明治の初め頃まで太陰曆を用ひてゐた。
- (10) マッチは一包十箱が十錢で買はれる。しかし一人で造るとして、こんなに安く賣れるであらうか。
- (11) 父はダーウインを醫者にしようと思つて大學にやつた。
- (12) ルーブル博物館も一覽しましたが、りつばな繪畫彫刻の多いのは恐らく世界第一であらうと思ひました。又エツフェル塔にも登つて見ました。塔の高さは三百メートルもあるさうです。



第二章 代名詞

代名詞  
人代名詞  
指示代名詞

- 一 私はあなたのお姉様をよく存じてゐます。
- 二 これは誰の書物でせう。
- 三 それをあちらの机の上に置いて下さい。

右の例の傍線を施した語のやうに、事物の名目の代はりに使つてこれを指示する語を代名詞といふ。

代名詞中、人の名の代はりに使はれるものを人代名詞といひ、事物場所方向を示すものを指示代名詞といふ。

人代名詞の例

わ われ 私 僕 小生  
 汝 あなた お前 君  
 か かれ あれ あの方 この人

體言

名詞代名詞を體言といふ。

このそののかのあのどの等は、本來代名詞こそかあどに助詞のが添うたものであるが、便宜上一代名詞として取扱つてよい。

指示代名詞の例

誰 どなた どの方  
 こ この これ そ その それ  
 か の あ の あれ どの どれ  
 こゝ そこ あそこ いづこ どこ  
 こなた こちら そなた そちら  
 あなた あちら いづかた どちら

練習

一次の文中から代名詞を選び出し、其の種類をいひなさい。



- (1) こはたゞ事ならず。
- (2) 彼處にゆきて彼の畫師のするさまを見給へ。
- (3) そはいと名殘惜しきことなり。
- (4) 貴女には此の度めでたく女學校に御入學の由御祝ひ申し上げ候。
- (5) あなたもすゐぶん大きくなりましたね。
- (6) 私が今度歸つて來て、青年團の規約を見た時、その整つてゐるのに驚いた。
- (7) それなるは佐野源左衛門常世か。これは何時ぞやの大雪に宿を借りた旅僧である。
- (8) どれを見ても枝といふ枝にはもう黄金色の實がなつてゐる。

- (9) どの山を見てもどの谷を見ても、蜜柑の木で聞かない處はない。
- (10) あちらでもこちらでも、さえた鉄の音がちよきんくと聞える。
- (11) あゝ、あれは僕の作つた曲だ。君、聽き給へ。なか／＼うまいではないか。
- (12) 日が暮れた。いづこともなく淋しい野寺の鐘が聞えて來る。

二右のほか、人代名詞を知つてゐるだけ擧げなさい。



第三章 動詞

一 孔子は、少時より學問に勵み、長じて後、魯の君に仕へ、大いに治績を擧げしかども、奸臣の爲にさまたげられ、遂に魯を去りぬ。

二 宣長は眞淵の志をつぎ、努力に努力を續けて、遂に古事記の研究を大成した。

右の例の傍線を施した語のやうに、事物の動作をあらはす語を動詞といふ。

一 瀬戸内海には、到る處に岬あり、灣あり。

二 棚の上に箱があり、その箱の中に手紙がある。

右のありあるは事物の存在をあらはす語であるが、これも動詞

動詞

である。

練習

次の文中から動詞を選び出しなさい。

(1) 左に折れて第二の鳥居を過ぎ、又右に折れて第三の鳥居の前に出づ。

(2) 病は口より入り、禍は口より出づ。

(3) 咲く花のにはふが如しと誇りし奈良の都も色移り香失せたり。

(4) 宣長は常に文通して眞淵の教を受けた。

(5) 風が吹く、花が散る、蝶々のやうに花が舞ふ。

(6) 刈る、切る、掘る、運ぶ、誰も彼も一心不亂に働く。



第四章 形容詞

形容詞

- 一 山高く、水深し。
- 二 煙たなびくとまやこそ、我がなつかしき住家なれ。
- 三 鶯は形はみにくい、が、聲は美しくい。

右の例の傍線を施した語は、事物の性質又は状態をあらはしてゐる。事物の性質又は状態をあらはす語は他にもあるが、其中で左の例のやうに、いひ切る場合に、文語ならばし、口語ならばい、又はしいとなるものを形容詞といふ。

文語

- 長し
- 短し
- 悲し
- 長い
- 短い
- 悲しい

用言

鬱陶し

動詞・形容詞を用言といふ。

練習

次の文中から形容詞を選び出しなさい。

- (1) うるはしき 眞玉 白玉、香よき木の實草の實、うづたかき積荷の中に、海山の寶を載せて、船は今靜かに歸る、懐かしき故郷の港。
- (2) 死は鴻毛より輕ろく、義は泰山より重し。
- (3) 近き船は行けども遠き帆影は動かんともせず。
- (4) 悔しいのか、嬉しいのか、悲しいのか、恥づかしいのか、辛いのか。
- (5) 赤い花が一面に咲いて誠に美しい。



第五章 助動詞

(附 居る辭)

一 苦心に苦心を重ねて集めたる出版費は遂に一錢も残らずなりぬ。

二 改めようと思へば改められる。

右の例の傍線を施した語のやうに、動詞に添うて其の意義を助け、色々な意味をあらはす語を助動詞といふ。

助動詞は主として動詞に添うて其の意義を助けるものであるが、次の場合のやうに他の品詞に添ふこともある。

名詞に添ふ場合

一 楠正成は忠臣なり。

二 それが女子としてのつとめだ。

助動詞

代名詞に添ふ場合

一 古今第一の忠臣は彼なり。

二 それを棄てたのは私です。

形容詞に添ふ場合

一 あの山は随分高いのです。

二 私が悪いのだ。

他の助動詞に添ふ場合

一 實に團扇に用ひられたる竹なりしなり。

二 多分明日は發表せられよう。

かやうに助動詞は動詞・名詞・代名詞・形容詞又は他の助動詞に添うて、その意義を助けるものである。

一 落花雪の如し。(雪のやうだ)



二 其の速きこと汽車の走るが如し。  
 右の例のやうに、如し(やうだ)といふ助動詞は、の又はがを挟んで上に續くのが普通である。

練習

一次の文中傍線のある語はみな文語の助動詞です。その意味を口語でいひなさい。

- (1) 明日は雨降らん。(降る)
- (2) 彼は單身樺太におもむけり。(過る)
- (3) 夜もいとふけ、月も既に入りぬ。(完)
- (4) 唯をりく興味ある特殊の事件を報道するに過ぎざりき。(打消)

かつよう

- (5) おのれは主人を迎へにとて出で行きけり。(つた)
- (6) 命も危ふかるべし。(やまう)
- (7) 患者に薬を飲ます。(使役)
- (8) 頼朝義経に義仲を攻めさす。(使役)
- (9) 旭日昇天の勢あるを思はしむ(使役)
- (10) 海まきあぐるたつまきも、起こらば起これ、驚かじ。(打消)
- (11) もはや泣くまじ。(打消)
- (12) 母は音楽を好まる。(尊敬)
- (13) 天顔殊にうるはしく笑ませ給ふ。(尊敬)
- (14) 神前にさげたしと願ひ出づる者多し(願望)

二次の文中から助動詞を選び出しなさい。



- (1) 曆は實に重寶チカラモノなものだ。こんな重寶チカラモノなものがあるのに、それを利用しないのは寶の持ちぐされだ。
- (2) 物すごい響は萬雷の如く、大地もふるひ、數百歩はなれた所でも、器に盛つた水が波紋をゑがく程です。
- (3) 下駄の音が聞える、弟が歸つたらしい。
- (4) 日本人ほどあつさりした色や味はひを好むものがあるまい。
- (5) 雨は降るだらう。しかし風は吹くまい。
- (6) 小僧一人だけにいろくの用を足させた。

第六章 助詞

一 東國へ行き給ふと聞きしに、今又此處に來られしは何故ぞ  
 二期限までに提出すればよいが、萬一後れると無効になる。  
 三 風さへ加はり、雨の音も激しい。  
 右の例の傍線を施した語のやうに、種々の語に添うて他の語との關係をあらはす語を助詞といふ。

練習

- 次の文中から助詞を選び出しなさい。
- (1) 停車場の外に出づれば、秋晴れの空すみで、暖かさ春の如し。



- (2) 君が代は千代に八千代にさぐれ石のいはほとなりて昔のむすまで。
- (3) 主人は聲を限りに呼べど僧は聞えぬにや、ふりかへりもせず。
- (4) 嬉しいにつけ悲しいにつけて思ひ出すのは親のこと。
- (5) こら、どうした。命が惜しくなつたか、妻子がこひしくなつたか。軍人となつて、いくさに出たのを男子の面目とも思はず、其の有様は何事だ。
- (6) ふと目を覺すと、遠くでかすかにきやん／＼といふ聲がする。

第七章 副詞

- 一 道きはめて險し。
- 二 島がかすかに見える。
- 三 非常に美しく、森の中を、大きな河がゆるやかに流れてゐます。

右の例のかすかにゆるやかに見える流れといふ動詞の意味を修飾し、きはめて非常に險し、美しくといふ形容詞の意味を修飾してゐる。かやうな語を副詞といふ。

- 一 この犬はいと速かに走る。
- 二 彼の女はや、暫く考へてゐました。

右の例のやうに副詞は又他の副詞の意味を修飾することもあ



る。

一 かくすかに島が見える。

二月が明るくてまるで晝のやうだ。

右の例のやうに、副詞は其の下の句全體を修飾することもある。かやうに副詞は動詞形容詞他の副詞、又は句等の意味を修飾するものである。

練習

二次の文中から副詞を選び出し、その修飾してゐる語句を示しなさい。

- (1) 三月堂 二月堂 霞につままれてさながら夢の如し。
- (2) 汽車はいと靜かに動き始めぬ。

(3) 立木 極めて 少なかりしかば、新たに植ゑ込みたる木の數、實に十數萬本に及べり。

(4) たま／＼元の大軍至るに及んで、文天祥大いに敗れ、遂に敵兵に捕へらる。

(5) 町はづれの川で水浴をした。水は意外に冷たくて、まるで氷のやうであつた。此の水浴が體にさはつたものか、王は俄かにはげしい熱病にかつた。

(6) がらりと雨戸を繰ると、さつと夜風が吹き込んで、燈火がちらく／＼となびく。

二次の副詞を使つて短文を作りなさい。

ひたすら せつせと あたかも よもや やがて



第八章 接 續 詞

接續詞

一 石炭・石油及び瓦斯は、現代の主なる燃料なり。  
 二 書を読み、且つ字を習ふ。  
 三 あの方は學問はありません。然し心はよい人です。  
 右の例の傍線を施した語のやうに、その前後の語句又は文を接續する語を接續詞といふ。

練習

- 一 次の文中から接續詞を選び出しなさい。  
 (1) 吉野に遊び、ついで高野山にのぼれり。  
 (2) 孔子は廣く各國をめぐりて、用ひられんことを

- 求めぬ。しかも遂に志を達することを得ざりき。  
 (3) 樺太は大陸の地續きなりや、又は離れ島なりや、世界の人は久しく之を疑問としたりき。然るに此の疑問を解決したる人、遂に我が日本人中より現はれぬ。  
 (4) 制服にて登校すべし。但し、病氣の時は此の限りにあらず。  
 (5) 氣候もよいし、それに交通も便利である。  
 (6) 彼は昨日出發しただらうか、それとも延期しただらうか。  
 (7) 鳩に手紙を運ばせるには、足にアルミニウムかセルロイドの細いくだを附け、或は胸に袋を掛け



させて其の中に入れる。  
 (8) 古い言葉を調べるのに一番よいのは萬葉集です。  
 そこで先づ順序として、萬葉集の研究を始めました。

二次の接續詞を使つて短文を作りなさい。

故に           もしくは           しかれども           だが  
 ところが       すると           もつとも           そこで  
 又               それですから       しかし

第九章 感動詞

感動詞

一 嗚呼、悲しいかな。  
 二 あはれ、友は此の世を去りぬ。  
 三 おやく、これは驚いた。  
 四 はい、承知いたしました。  
 右の例の傍線を施した語のやうに、感動した場合に覺えず發する語や、呼びかけ、應答の語を感動詞といふ。  
 注意 「あな面白の樂の音や」「あゝ困つたね」のあな、あゝは感動詞であるが、やく、ね等は感動の意をあらはす助詞である。即ち感動詞は、獨立した發聲の語だけをいふのである。

練習



次の文中から感動詞を選び出しなさい。

- (1) すは勝ちたるぞ。
- (2) いで大船を乗り出して、我は拾はん海の富
- (3) いでや目にものみせん。
- (4) あはれ太閤世を去りて、世嗣ぎの君はいとけなし。
- (5) あゝ、あなたはベートーベン先生ですか。
- (6) まあ何といふよい曲でせう。私にはもうとても弾けません。
- (7) 「やあ、すつかり變はつた」と聲をあげると、兄は「うん、これが四十日間の汗のたまものさ」といつた。
- (8) 「失禮ながらお名前を聞かせて頂きたい。」「いや、名前を申し上げる程の者ではございません。」

第二篇 單語篇 下

第一章 文語動詞の活用形

書

か……すむば  
 き……てたり始む  
 く……こと人  
 け……どもどば  
 け

起

き……すむば  
 き……てたり出べ  
 く……こと人  
 くれ……どもどば  
 きよ



有

れ  
れ……どもどば  
る……こと人  
り  
り……たりがたし  
ら……すむば

(爲)

せ……すむば  
し……たり終はる  
す  
する……こと人  
すれ……どもどば  
せよ

死

な……すむば  
に……たり絶ゆ  
ぬ  
ぬる……こと人  
ぬれ……どもどば  
ね

(蹴)

け……すむば  
け……たり始む  
ける  
ける……こと人  
けれ……どもどば  
けよ

(射)

い……すむば  
い……たり切る  
いる  
いる……こと人  
いれ……どもどば  
いよ

(來)

こ……すむば  
き……たり始む  
く  
くる……こと人  
くれ……どもどば  
こよ

棄

て……すむば  
て……たり去る  
つ  
つる……こと時  
つれ……どもどば  
てよ



右の例でわかるやうに、

一 大部分の動詞には、變化する部分と變化しない部分とがある。

二 動詞の變化は、五十音圖の同行の間に起こる。

三 動詞は六つの形に變化する。

かやうに、動詞の形の變化することを活用といひ、變化しない部分を語幹、變化する部分を語尾といひ、又動詞の活用の六つの形を活用形といふ。

第一形 主として助動詞ずむ助詞ば等に續けて動作が未だ成立してゐない意をあらはす形であるから、未然形といふ。

第二形 主として用言に連なる形であるから、連用形といふ。  
一書を讀み、字を習ふ。

活用  
語尾  
語幹

未然形  
連用形

ニ父は畠に出で、子は山に行く。

右の例のやうに、連用形は、又文意を中止して下に續ける爲に使はれる形である。

遊び 讀み書き 山登り

連用形は又右の例のやうに、轉じて名詞となる形である。

第三形 主として文意を終止する爲に使はれる形であるから、

終止形といふ。

第四形 主として體言に連なる形であるから、連體形といふ。

第五形 主として助詞どもどば等に續けて、動作が已に成立してゐる意をあらはす形であるから、已然形といふ。

第六形 専ら命令の意をあらはす爲に使はれる形であるから、命令形といふ。

終止形  
連體形

已然形

命令形



練習

- 一、次の文中から動詞を選び出し、それを活用させなさい。
- (1) 都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關。
  - (2) 旅僧もまた主人夫婦の情心にしみて、そゞろに別かれ難き思あり。
  - (3) 猿も木より落つることあり。
  - (4) 夏は来ぬ。木々の緑、色鮮かに目も覺むる心地す。

二次の語を活用させなさい。

来<sup>ク</sup> 爲<sup>ス</sup> 積<sup>ム</sup> 死<sup>ヌ</sup> 報<sup>ル</sup> 用<sup>フ</sup> 居<sup>ル</sup> 蹴<sup>ル</sup> 告<sup>グ</sup>  
 叫<sup>ブ</sup> 閉<sup>ム</sup> 釣<sup>ル</sup> 得<sup>ル</sup> 着<sup>ル</sup> 恥<sup>ズ</sup> 流<sup>ル</sup> 煮<sup>ル</sup> 有<sup>リ</sup> 来<sup>ル</sup>

四段活用

一 四段活用

第二章 文語動詞の活用の種類

| 破 | 書 | 語幹 | 語尾 |
|---|---|----|----|
| ら | か |    | 未然 |
| り | き |    | 連用 |
| る | く |    | 終止 |
| る | く |    | 連體 |
| れ | け |    | 已然 |
| れ | け |    | 命令 |

右の例のやうに、五十音圖の「ア」列・「イ」列・「ウ」列・「エ」列に活用するものを四段活用といふ。

四段活用の動詞は五十音圖の「カ」「ガ」「サ」「タ」「ハ」「バ」「マ」「ラ」の各行にある。

上二段活用

二 上二段活用



|    |    | 語幹 | 語尾 |
|----|----|----|----|
| 老  | 起  |    | 未然 |
| い  | き  |    | 連用 |
| い  | き  |    | 終止 |
| ゆ  | く  |    | 連體 |
| ゆる | くる |    | 已然 |
| ゆれ | くれ |    | 命令 |
| いよ | きよ |    |    |

右の例のやうに、五十音圖のイ列ウ列に活用し、連體形に、已然形に、命令形によが添ふものを上二段活用といふ。

上二段活用の動詞は五十音圖のカ(ガ)タ(ダ)ハ(バ)マ(マ)ヤウの各行にある。

上一段活用

三 上一段活用

|     |    | 語幹 | 語尾 |
|-----|----|----|----|
| (射) |    |    | 未然 |
| ひ   | い  |    | 連用 |
| ひ   | い  |    | 終止 |
| ひる  | いる |    | 連體 |
| ひる  | いる |    | 已然 |
| ひれ  | いれ |    | 命令 |
| ひよ  | いよ |    |    |

右の例のやうに、五十音圖のイ列にだけ活用し、終止形と連體形

下二段活用

四 下二段活用

|     |    | 語幹 | 語尾 |
|-----|----|----|----|
| (得) |    |    | 未然 |
| え   | え  |    | 連用 |
| え   | え  |    | 終止 |
| ゆる  | うる |    | 連體 |
| ゆれ  | うれ |    | 已然 |
| えよ  | えよ |    | 命令 |

に、已然形に、命令形によが添ふものを上一段活用といふ。

上一段活用の動詞は五十音圖のカ(ナ)ハ(マ)ヤウの各行にある。

下一段活用

五 下一段活用

|     |  | 語幹 | 語尾 |
|-----|--|----|----|
| (蹴) |  |    | 未然 |
| け   |  |    | 連用 |
| け   |  |    | 終止 |
| ける  |  |    | 連體 |
| ける  |  |    | 已然 |
| けれ  |  |    | 命令 |
| けよ  |  |    |    |

右の例のやうに、五十音圖のウ列エ列に活用し、連體形に、已然形に、命令形によが添ふものを下二段活用といふ。

下二段活用の動詞は五十音圖の全行にある。



蹴るといふ動詞は右のやうに活用する。この活用を下一段活用といふ。

下一段活用の動詞は蹴るといふ一語だけであるが、此の語は今は四段活用に使はれることもある。

以上五種の活用を正格活用といふ。

正格活用  
カ行變格活用

六 カ行變格活用

|     |    |
|-----|----|
| 語幹  | 語尾 |
| (來) | 未然 |
| こ   | 連用 |
| き   | 終止 |
| く   | 連體 |
| くる  | 已然 |
| くれ  | 命令 |
| こよ  |    |

來といふ動詞は右のやうに活用する。この活用をカ行變格活用略してカ變といふ。

カ變の動詞は來といふ一語だけである。

サ行變格活用

七 サ行變格活用

|     |    |
|-----|----|
| 語幹  | 語尾 |
| (爲) | 未然 |
| せ   | 連用 |
| し   | 終止 |
| す   | 連體 |
| する  | 已然 |
| すれ  | 命令 |
| せよ  |    |

爲といふ動詞は右のやうに活用する。この活用をサ行變格活用略してサ變といふ。

サ變の動詞は、元來すといふ一語だけであるが、他の語にすが添うて、多くのサ變の動詞が出来る。

例へば

- 勉強す 登山す 罰す 達す
- 報ず 講ず 論ず 歎ず
- 旅す 罪す
- 全らす 辱らす 空しらす
- 重んず 輕んず 先んず



ナ行變格活用

八 ナ行變格活用

|   |    |    |
|---|----|----|
|   | 語幹 | 語尾 |
| 死 | な  | に  |
|   | ぬ  | ぬる |
|   | ぬれ | ぬね |

死ぬといふ動詞は右のやうに活用する。この活用をナ行變格活用略してナ變といふ。

ナ變の動詞は、死ぬの外往ぬといふ語があるが、今は方言の外は使はれない。

ラ行變格活用

九 ラ行變格活用

|   |    |    |
|---|----|----|
|   | 語幹 | 語尾 |
| 有 | ら  | り  |
|   | る  | れ  |

有りといふ動詞は右のやうに活用する。この活用をラ行變格活用略してラ變といふ。

ラ變の動詞は、有りの外居り侍りといふ二語があるが、今は居るが四段に使はれる外、あまり使はれない。

一 烈しかり……烈しくありの約まつたもの

二 堂々たり……堂々とありの約まつたもの

三 明瞭なり……明瞭にありの約まつたもの

右のやうに、形容詞又は副詞に動詞ありが添うて、その形の約まつたものがある。意味は形容詞と同じく、性質又は状態をあらはしてゐるが、形はラ變の動詞と同じであるから、これを形容動詞といふ。

一 形容動詞はラ變の動詞と見なす。

以上四種の活用を變格活用といふ。

文語動詞の活用には以上の九種がある。

變格活用

形容動詞



第三章 文語動詞の識別法

一 活用の種類を識別する法

語数が少なく、暗記するとよいもの

上一段 著る<sup>+</sup> 似る<sup>+</sup> 煮る<sup>+</sup> 干る<sup>+</sup> 見る<sup>+</sup> (顧みる<sup>+</sup> 惟みる<sup>+</sup>)

下一段 鑑みる<sup>+</sup> 試みる<sup>+</sup> 射る<sup>+</sup> 鑄る<sup>+</sup> 居る<sup>+</sup> 率ゐる<sup>+</sup>

力 蹴る<sup>+</sup>

ナ 變 くる<sup>+</sup> (來)

サ 變 六す<sup>+</sup> (爲) 他語にすの添うたもの

ナ 變 死ぬ<sup>+</sup> (往ぬ)

ラ 變 有り<sup>+</sup> (居り) (侍り)

右の外は

四 段 打消のずがア列の音に添ふ。 讀ま……ず。

上二段 打消のずがイ列の音に添ふ。 落ち……ず。

下二段 打消のずがエ列の音に添ふ。 消え……ず。

二 活用の假名遣を識別する法

(イ) ア行・ハ行・ヤ行・ウ行の識別法

ア行 得………下二段

ワ行 植う 飢う 据う………下二段

ヤ行 居る<sup>+</sup> 率ゐる………上一段

ヤ行 終止形がゆとなるもの

右の外はすべてハ行活用である。

(ロ) ザ行・ダ行の識別法



ザ行 1 混ず……………下二段

2 サ變動詞中の講ず・應ず・論ず・變ず・重んず等のやうに語尾の濁るもの。

右の外はすべてタ行活用である。

練習

一、次の文中から動詞を選び出し、其の活用の種類をいひなさい。

- (1) 内海の沿岸及び島々には名勝の地少なからず。
- (2) 船の周圍に彈丸落下して、水煙を立て、時に全く船影を蔽ふことあり。
- (3) 朝疾く起きて稻田のあたりをさまよふ。

(4) 畫師は夜もすがら寝ねすして、明日はかく畫がかんなど獨言してゐたり。

(5) 海の靜かなることは鏡の如く、朝日夕日を負ひて島がくれゆく白帆の影ものどかなり。

(6) 愛すべく美しくしき山野は、更に太古以來の歴史と結び、文學と結びて、感いよ／＼深きを覺ゆ。

(7) 富貴は人のねがふ所なり。然れども正しき道によるに非ざれば我之に居らず。

(8) エヂソンは例の如く實驗室にこもりて研究に餘念なかりしが、ふと見れば机上に形珍しき一本の團扇あり。何心なく手に取りて眺めゐたりし彼の眼は異様に輝きぬ。

二、次の語を活用の種類に分類して活用表をつくりなさい。



報ゆ 押す 鑄る 受く 死ぬ 去る 蹴る 來 歴 旅行す

三次の文中の假名遣の誤を正しなさい。

- (1) 我が望は遂に絶へたり。
- (2) 鷹は飢ゆとも穂はつまず。
- (3) 教ゆるは學ぶの半ばなり。
- (4) 覺へず涙を落せり。
- (5) 彼の誠に感づる者多かりき。
- (6) 汝我が言を用いざれば老ひて後に悔ゆることあらん。
- (7) 榮ふる御代にあへる我等は幸ひなり。
- (8) 田を植ふる乙女の歌遙かに聞ゆ。

第四章 口語動詞の活用

|          |          |
|----------|----------|
| 死        | 有        |
| な……………ない | ら……………う  |
| に……………ます | り……………ます |
| ぬ……………人  | る……………處  |
| ぬ……………ば  | る……………ば  |
| ね……………ば  | れ……………ば  |
| ね……………ば  | れ……………ば  |

右の例のやうに、文語のナ變・ラ變は、口語では四段となる

|          |          |
|----------|----------|
| 起        | 棄        |
| き……………ない | て……………ない |
| き……………ます | て……………ます |
| きる       | てる       |
| きる……………時 | てる……………時 |
| きれ……………ば | てれ……………ば |
| きよ(きる)   | てよ(てる)   |



右の例のやうに、文語の上二段は口語では上二段、文語の下二段は口語では下二段となる。

|          |          |          |          |
|----------|----------|----------|----------|
| (來)      |          | (爲)      |          |
| こ……………ない | き……………ます | し……………ない | せ……………ぬ  |
| くる       | くる……………人 | する       | する……………人 |
| くれ……………ば | くれ……………ば | すれ……………ば | すれ……………ば |
| こい       |          | しろ       | せよ       |

右の例のやうに、カ變サ變は文語と口語とでは形が違ふ。其の他、文語の四段上二段下二段は口語でも同じである。

蹴るは、口語では文語よりも更に四段活用に使はれることが多い。即ち、口語動詞の活用は左の五種となる。

- 四段活用……………文語の四段・ナ變・ラ變
- 上二段活用……………文語の上二段・上一段
- 下二段活用……………文語の下二段・下一段
- カ行變格活用……………終止形・命令形が文語と違ふ。
- サ行變格活用……………終止形が文語と違ふ外、未然形・命令形に二様の使ひ方がある。

練習

- 一、次の文中から動詞を選び出し、其の活用の種類をいひなさい。
- (1) 父が木を伐れば自分は雑草を刈る、父が畠を打てば自分は種をま
- く。
- (2) 裁判の目的は決して人を争はせ、又は人を罰することではない。



- (3) 札幌へ来て先づ感ずることは、街路が眞直ぐで幅の非常に広いことだ。
- (4) 「人は火を用ひる動物」といふやうに、火を使用するのは人類ばかりで、他の動物には見られない。
- (5) 東の空が明かくなると、今まで軍港の關に包まれてゐた軍艦の壯大な姿がだん／＼にあらはれて来る。
- (6) 鶏が麥のこぼれたのを食ひに来ては、追はれて逃げて行く。
- (7) ひぐらし蟬の聲が聞え始めると、暑さがどんなにはげしくても、妙に秋らしい氣がする。
- (8) 昔の武士はたとひ飢ゑて死ぬとも二君に仕へることを恥ぢた。
- (9) 王は間もなく健康を回復して、再び其の英姿を陣頭にあらはす事が出来た。

- (10) さや／＼揺れる葉蔭では露の散るのがうれしいか、ころ／＼と蟲が鳴く。

二次の文中○のところの適當な假名を入れなさい。

- (1) 急に天が曇つて来て星影一つさへ見○ない。
- (2) 大砲を鑄て砲臺に据○る。
- (3) 問ふことを恥○るものは立派な人にはなれない。
- (4) 老○ては子に従へ。
- (5) 庭園に花を植○て楽しむ。
- (6) 彼の率○る一隊は敵の右側に出た。
- (7) 月が霜のやうに冴○、木枯が海のやうに吼○る夜は、物音がすべて絶○て、何ともい○ぬ物凄さを感じ○る。

三、動詞の文語口語の活用の比較表を作りなさい。



第五章 形容詞の活用

文語形容詞

|   |         |    |
|---|---------|----|
| 高 | く……ば    | とも |
|   | く……て    | 聳ゆ |
| し | き……こと   | 山  |
|   | けれ……ども  | ば  |
| 樂 | しく……ば   | とも |
|   | しく……て   | 遊ぶ |
| し | しき……こと  | 日  |
|   | しけれ……ども | ば  |

右の例でわかるやうに、形容詞は

- 一 カ行・サ行の兩行に跨がつて活用する。
- 二 命令形はない。
- 三 左の二通りの活用がある。

ク活用  
シク活用

口語形容詞

前者をク活用といひ、後者をシク活用といふ。

| 語幹 | 語尾  |     |
|----|-----|-----|
|    | 未然  | 連用  |
| 高  | く   | く   |
| 樂  | しく  | しく  |
|    | し   | し   |
|    | しき  | しき  |
|    | しけれ | しけれ |
|    | 終止  | 連體  |
|    | 已然  |     |

|   |            |    |
|---|------------|----|
| 高 | く(う)……聳える  | ない |
|   | い……こと      | 山  |
| 樂 | しく(しう)……遊ぶ | ない |
|   | しい……こと     | 日  |
| し | しけれ……ば     |    |

右の例でわかるやうに、口語形容詞の活用には未然形がない。



副詞形

形容詞の連用形は副詞の働きをする場合が多いので、これを副詞形ともいふ。

一 水清く流る。

二 花があはたゞしく散つてしまつた。

練習

一、次の文中から形容詞を選び出し其の活用の種類をいひなさい。

(1) 松青く樓門赤く、茶煙絶えぐに、あがりて花極めて白し。

(2) 枇杷はうまけれども種子大きく肉少なきは飽かぬ心地す。

(3) 朝夕は凌ぎやすけれども日中は堪へ難し。

(4) 多くの動物を注意して見ると、いろくの珍しい事があるのに気がつく。

(5) だら／＼坂を登りきると、道は低い峯傳ひになる。何時もは薄暗い程茂り合つてゐる兩側の木立も、まだ若葉だけに、下草まで見えるぐらゐ明るい。

(6) 寶玉をちりばめたやうなかはい、目紅をさしたかと思はれるやさしいくちばし、美しい羽毛に包まれた圓い胸、鳩は見るからに愛らしいものである。

二次の形容詞を活用させなさい。

無し 鋭し 羨まし 悲しい 勇ましい



第六章 用言の音便

動詞の音便

或語が他の語に続く場合、發音の便宜上その音が變化することがある。これを音便といふ。動詞の音便はその連用形から助詞のて、口語助動詞のた、文語助動詞のたりに続く場合に起る。

音便  
イ音便

一 イ音便 きぎがいに轉ずる場合

|      |     |      |     |
|------|-----|------|-----|
| 咲き   | 咲いた | 泳ぎ   | 泳いだ |
| 咲いたり | 咲いて | 泳いだり | 泳いで |

行きだけは行つて行つた行つたりのやうに次に説く所の促音便となる。

ウ音便

二 ウ音便 ひがうに轉ずる場合

|    |      |
|----|------|
| 買ひ | 買うた  |
| 買ひ | 買うたり |

撥音便

三 撥音便 にびみが撥音のんに轉ずる場合

|      |     |      |     |      |     |
|------|-----|------|-----|------|-----|
| 死に   | 死んだ | 飛び   | 飛んだ | 怨み   | 怨んだ |
| 死んだり | 死んで | 飛んだり | 飛んで | 怨んだり | 怨んで |

促音便

四 促音便 ちひりが促音のつに轉ずる場合

|      |     |     |     |      |     |
|------|-----|-----|-----|------|-----|
| 勝ち   | 勝つた | 買ひ  | 買った | 賣り   | 賣つた |
| 勝つたり | 勝つて | 買った | 買って | 賣つたり | 賣つて |



ぎにびみ音が音便になる時は、次に來るてたりは濁音となる。  
動詞の音便は四段ナ變ラ變の連用形に起こる。

形容詞の音便

一 イ音便 文語形容詞の連體形がいとなる場合

難きかな。……難いかな。

美しくしきかな。……美しいかな。

二 ウ音便 文語形容詞の連用形がうとなる場合

山高くして、……山高うして、

若くして死す。……若うして死す。

口語形容詞の連用形の語尾のうしう、終止形連體形の語尾のいし  
も本來は音便であるが、既に活用形中に加へたから、音便として取扱

はない。

練習

一次の文中の音便を示し、其の種類をいひなさい。

(1) 救はんとすれど、悲しいかな我が力及ばず。

(2) 誓うて艱難に堪へ、初志を貫くべし。

(3) 「すは勝つたるぞ。襲へ〜。」とぞ叫んだりける。

(4) 山高うして水清く、松青うして砂白し。

(5) 飛んで火に入る夏の蟲。

(6) 朝に星を戴いて出で、夕べに月を踏んで歸る。

(7) 東が次第に白んで來て、下度をちらに向いてゐる硝子窓にほのか  
な色がさして來る。



(8) 日はもう西に傾いてゐる。ふと見あげると、庭の柿の木には、すゞなりになつた實が夕日をあびて、珊瑚珠のやうにかゞやいてゐる。

二、次の文の誤を正し、其の理由をいひなさい。

- (1) 久しふあはざりし友に會ひて語るは楽しきことなり。
- (2) 天を仰ひて嘆息せり。
- (3) 山紫に水清ふ、大和は歌によいところ、行けば行くほど花が散る。
- (4) 此の道に沿ふてゆけば海岸に出る。
- (5) 風呂敷包を背負つた背中が汗ばむで来る。
- (6) 一寸新聞を讀むでからゆきます。
- (7) お見送りを辱ふし有りがたふ御座いました。
- (8) 私はあなたが死むだ子供生まれがはりのやうに思へます。

時の助動詞

完了

第七章 文語助動詞の種類及び活用

一 時の助動詞

(イ) 完了の助動詞 つぬたりり

花咲き…つ。

…ぬ。

…たり。

花咲け…り。

| 語  | 活用 |
|----|----|
| つ  | 未然 |
| たり | 連用 |
| り  | 終止 |
| る  | 連體 |
| たれ | 已然 |
| てよ | 命令 |



過去

(ロ) 過去の助動詞 きけり

花散り……き。

……けり。

|    |    |    |
|----|----|----|
|    | 語  | 活用 |
| けり | き  | 未然 |
|    |    | 連用 |
| けり | き  | 終止 |
| ける | し  | 連體 |
| けれ | しか | 已然 |
|    |    | 命令 |

未來

(ハ) 未來の助動詞 む

明日は雨晴れ……む。

|   |   |    |
|---|---|----|
|   | 語 | 活用 |
| む |   | 未然 |
|   |   | 連用 |
| む |   | 終止 |
| む |   | 連體 |
| め |   | 已然 |
|   |   | 命令 |

未來の助動詞むは同時に推量の意をあらはし、又意志をあ

受身の助動詞

二 受身の助動詞 るらる

むは文章中では、んと書くことが多い。

明日は妹も行か……む。(推量)

明日は我も行か……む。(意志)

犬人に打た……る。

賊、捕へ……らる。

|     |    |    |
|-----|----|----|
|     | 語  | 活用 |
| らる  | る  | 未然 |
| られ  | れ  | 連用 |
| らる  | る  | 終止 |
| らるる | るる | 連體 |
| らるれ | るれ | 已然 |
| られよ | れよ | 命令 |

可能の助動詞

三 可能の助動詞 るらるべし・べかり

此の書は、我にも讀ま……る。



何人にも了解せ：らる。

此の山は、容易に登る：べし。

危険にして、近づく：べから：ず。

| 語   | 活用  |     |    |    |     |
|-----|-----|-----|----|----|-----|
|     | 未然  | 連用  | 終止 | 連體 | 已然  |
| べし  | べく  | べく  | べし | べき | べけれ |
| べかり | べから | べかり |    |    |     |

る。らるの活用は受身の場合と同じである。但し、命令形はない。

べかりの未然形に打消のずがつく時は、右の例のやうに不能の意をあらはす外に、禁止の意をもあらはす。

花を折る：べから：ず。

四 使役の助動詞 すさすしむ

五 崇敬の助動詞 るらるすさすしむ

下女に水を汲ま：す。  
 犬を子供に馴れ：さす。  
 頼朝、義経をして、義仲を攻め：しむ。

| 語  | 活用 |    |    |     |     |
|----|----|----|----|-----|-----|
|    | 未然 | 連用 | 終止 | 連體  | 已然  |
| す  | せ  | せ  | す  | する  | すれ  |
| さす | させ | させ | さす | さする | さすれ |
| しむ | しめ | しめ | しむ | しむる | しむれ |

父、東京に行か：る。  
 先生は、本日缺席せ：らる。  
 殿下、臨幸あら：せ：らる。  
 皇后陛下、日光に行啓せ：させ：給ふ。



天皇陛下には、親しく觀兵式に臨ましめ給ふ。らるは受身すさすしむは使役の場合と活用が同じである。

随つて今は未然形連用形の外は餘り使はれない。

崇敬の意をあらはすには、右のやうな助動詞の外に、給ふおはしますまします奉る侍り候といふやうな動詞が轉じて使はれる場合がある。

殿下、槍ヶ嶽に登り給ふ。  
母宮もなげきおはします。  
皇太神は此の處に鎮まりまします。  
幼きより養ひ奉る。

推量の助動詞

六 推量の助動詞 らむらしべしめりけむまし

かくて夜を明かし侍り。  
ありがたく頂戴仕つり候。

雨降るらむ。  
……らし。  
……べし。  
……めり。  
雨降りけむ。  
御代とこしへにめでたからまし。

| 活用 | 未然 | 連用  | 終止 | 連體  | 已然 | 命令 |
|----|----|-----|----|-----|----|----|
| 語  | らむ |     | らし | らしき | らめ |    |
|    |    | らしく |    |     |    |    |



|    |    |    |     |
|----|----|----|-----|
| まし | けむ | めり | べし  |
|    |    |    | べく  |
|    |    |    | べく  |
| まし | けむ | めり | べし  |
| まし | けむ | める | べき  |
| まし | けめ | めれ | べけれ |
| まし |    |    |     |

けむは過去の推量である。

らむけむは文章中ではらんけんと書くことが多い。

べしは可能推量の意をあらはす外に、命令・義務・意志等の意をあらはすことがある。

汝速かに行く：べし。(命令)

國民は國法に従ふ：べき：なり。(義務)

我也見物す：べし。(意志)

らしは古くはらし(終止)らし(連體)らし(已然)と活用してゐた。

七 打消の助動詞 ずざりじまじ

風吹か……ず。

……ざり……き。

……じ。

風吹く……まじ。

|    |    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 話  | 活用 | 未然 | 連用 | 終止 | 連體 | 已然 | 命令 |
| ず  | ず  | ず  | ず  | ず  | ぬ  | ね  |    |
| ざり | ざら | ざり |    |    | ざる | ざれ | ざれ |
| まじ | まじ | まじ | まじ | まじ | まじ | まじ | まじ |
| まじ | まじ | まじ | まじ | まじ | まじ | まじ | まじ |
| まじ | まじ | まじ | まじ | まじ | まじ | まじ | まじ |
| まじ | まじ | まじ | まじ | まじ | まじ | まじ | まじ |

じまじは右の例のやうに打消の推量の意となる外に、決意をもあらはす。



指定の助動詞

八

指定の助動詞 なりたり

月の出づる...なり。

孔子は聖人...なり。

君、君...たり、臣、臣...たり。

再び過失を繰り返さ...じ。(繰り返す...まじ)

| 語  | 活用 | 未然 | 連用 | 終止 | 連體 | 已然 | 命令 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|
| なり |    | なら | なり | なり | なる | なれ |    |
| たり |    | たら | たり | たり | たる | たれ | たれ |

咏嘆の助動詞

九

咏嘆の助動詞 なりけり

蟲の聲す...なり。

悲しきものは、我が身なり...けり。

| 語  | 活用 | 未然 | 連用 | 終止 | 連體 | 已然 | 命令 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|
| なり |    |    |    | なり | なる | なれ |    |
| けり |    |    |    | けり | ける | けれ |    |

願望の助動詞

一〇

願望の助動詞 たしまほし

今日は静養し...たし。

月見に行か...まほし。

| 語   | 活用 | 未然   | 連用   | 終止  | 連體   | 已然    | 命令 |
|-----|----|------|------|-----|------|-------|----|
| たし  |    | たく   | たく   | たし  | たき   | たけれ   |    |
| まほし |    | まほしく | まほしく | まほし | まほしき | まほしけれ |    |

比況の助動詞

一一

比況の助動詞 如し

落花雪の...如し。

雷の落つる(が)...如し。



|    |    |
|----|----|
| 語  | 活用 |
| 如し | 未然 |
| 如く | 連用 |
| 如く | 終止 |
| 如し | 連體 |
| 如き | 已然 |
|    | 命令 |

如しは轉じて推量の意に使はれることがある。

彼の女は未だ知らざるもの：如し。

右のやうに、助動詞には、(一)動詞に似た活用のもの、(二)形容詞に似た活用のもの、(三)獨特の活用のものである。

### 練習

次の文中から助動詞を選び出し、其の種類及び活用をいひなさい。

- (1) 過ぎたるはなほ及ばざるが如し。
- (2) こはたゞ事ならじと本營に急報すれば、將軍直ちに物見の兵を出

だしてうかゞはしむ。

- (3) 千木チギのほとりを飛べる鳩の、さながら雀の如く見ゆるも、社殿の高  
大なる爲なるべし。

- (4) 主上はや院庄に入らせ給ふ。

- (5) なぎさに立ちて昔を偲べば、そのかみ此處にいかめしく向かひあ  
ひけん英雄の姿、今まのあたり見るが如し。

- (6) いづかだに志してか日盛のやけたる道を蟻の行くらむ。

- (7) 花は櫻木の諺自ら思ひ出でらる。

- (8) 氣の毒と思ひけん、僧をば待たせおき外に出で行きけり。

- (9) 「先生の墓所は細道なれば知れ申すまじ、案内し參らせん。」とて導  
き行きけり。

- (10) さし昇る朝日の如くさわやかにもたまほしきは心なりけり。



第八章 口語助動詞の種類及び活用

時の助動詞

過去

一 時の助動詞

(イ) 過去の助動詞 ただ

朝早く起き：た。

|    |    |
|----|----|
| 語  | 活用 |
| た  | 未然 |
| たら | 連用 |
| たり | 終止 |
| た  | 連體 |
| た  | 已然 |
|    | 命令 |

たはだとなることがある。

風が凧い：だ。

高く飛ん：だ。

口語では過去と完了との區別がない。

(ロ) 未來の助動詞 うよう

未來

明日は雨が降ら：う。

明日は晴れ：よう。

|    |    |
|----|----|
| 語  | 活用 |
| う  | 未然 |
| う  | 連用 |
| よう | 終止 |
| う  | 連體 |
| よう | 已然 |
|    | 命令 |

う、ようも文語のむと同じやうに推量意志をもあらはす。

やがて父も歸ら：う。(推量)

多分母も歸宅し：よう。(同前)

私も行か：う。(意志)

今度こそ勉強し：よう。(同前)

二 受身の助動詞 れるられる

主人に叱ら：れる。

受身の助動詞



主人に譽められる。

|     |    |    |
|-----|----|----|
|     | 語  | 活用 |
| られる | れる | 未然 |
| られ  | れ  | 連用 |
| られ  | れ  | 終止 |
| られる | れる | 連體 |
| られる | れる | 已然 |
| られ  | れ  | 命令 |
| られろ | れろ |    |

可能の助動詞

三 可能の助動詞 れるられる

誰でも行かされる。

誰にでも覚えられる。

活用は受身の場合と同じである。但し、命令形はない。

使役の助動詞

四 使役の助動詞 せるさせる

生徒に字を書かせる。

子供に悪戯をやめさせる。

|     |     |    |
|-----|-----|----|
|     | 語   | 活用 |
| せる  | せ   | 未然 |
| せる  | せ   | 連用 |
| せる  | せる  | 終止 |
| せる  | せる  | 連體 |
| せ   | せ   | 已然 |
| せよ  | せよ  | 命令 |
| させ  | させ  |    |
| させる | させる |    |
| させる | させる |    |
| させ  | させ  |    |
| させろ | させろ |    |

崇敬の助動詞

五 崇敬の助動詞 れるられるます

兄上が種を蒔かされる。

父上が木を植ゑられる。

草取は私がします。

|    |    |    |
|----|----|----|
|    | 語  | 活用 |
| ます | ませ | 未然 |
| ます | まし | 連用 |
| ます | ます | 終止 |
| ます | ます | 連體 |
| ます | ませ | 已然 |
| ませ | ませ | 命令 |

れるられるの活用は、可能の場合と同じである。

右の外せられるさせられるあそばすなさるいたしますまう  
します等の合成語が使はれる。これ等は便宜上一つの助動  
詞として取扱つてよい。



推量の助動詞

六 推量の助動詞 らしい

あの人はもう知つてゐる：らしい。

| 活用  | 未然 | 連用           | 終止  | 連體  | 已然 | 命令 |
|-----|----|--------------|-----|-----|----|----|
| らしい |    | らしく<br>(らしう) | らしい | らしい |    |    |

打消の助動詞

七 打消の助動詞 ぬないまい

私は知らぬ。(ん)  
：ない。

あの子も知る：まい。

| 活用 | 未然 | 連用 | 終止   | 連體   | 已然  | 命令 |
|----|----|----|------|------|-----|----|
| ぬ  |    | す  | (んぬ) | (んぬ) | ね   |    |
| ない |    | なく | ない   | ない   | なけれ |    |
| まい |    |    | まい   |      |     |    |

指定の助動詞

八 指定の助動詞 だです

まいは文語のじまじと同じやうに、打消の推量の意をあらはす外に、決意をもあらはす。  
もう決してあの家には行く：まい。

昨日來たのはあの人：だ。  
これは私の本：です。

| 活用 | 未然 | 連用 | 終止 | 連體 | 已然 | 命令 |
|----|----|----|----|----|----|----|
| だ  | だら | だつ | だ  |    |    |    |
| です | でせ | でし | です |    |    |    |

だですが活用語の下に添ふ時にはのだのですとなる。  
私は勉強する：のだ。  
あの山は随分高い：のだ。



願望の助動詞

そんな事はない：のです。  
右の外であるといふ合成語がよく使はれる。

九 願望の助動詞 たい

首尾よく及第し：たい。

|    |    |    |    |    |     |    |
|----|----|----|----|----|-----|----|
|    | 活用 |    |    |    |     |    |
| 語  | 未然 | 連用 | 終止 | 連體 | 已然  | 命令 |
| たい |    | たく | たい | たい | たけれ |    |

比況の助動詞

一〇 比況の助動詞 やうだやうですやうであるといふ合成

語が使はれる。

落花が雪の：やうだ。

海は静かで、壘を敷いた：やうです。

銀の砂を撒いた：やうである。

右の各語は、文語の如しと同じやうに、轉じて推量の意に使

はれることがある。

あの人はまだ知らない：やうです。

詠嘆の意は助詞ねえ(なあ)等を添へてあらはし、別に助動詞はな  
い。

練習

次の文中から助動詞を選び出し、其の種類をいひなさい。

(1) 老人は大分疲れたやうである。少年は鐵瓶の湯をついで老人に  
すゝめた。

(2) 世界一といはれるナイヤガラニヤガラの瀧は、アメリカ合衆國とカナダと  
の國境にあります。

(3) もう人にはたよるまい。自分一人で修行しよう。







|    |                |   |   |                |   |
|----|----------------|---|---|----------------|---|
|    |                | 未 | 然 | 連              | 用 |
| カ變 | 來 <sup>カ</sup> | し | し | 來 <sup>キ</sup> | し |
| サ變 | 爲 <sup>セ</sup> | し | し | 爲 <sup>シ</sup> | し |
|    |                | か | か | か              | か |

終止形きはカ變にはつかない。

又、サ行四段に「し」かがつく時「過ぎし時」「過ぎしかば」となるべきを「過ぎせし時」「過ぎせしかば」となる類は差支ない。

けり……全動詞の連用形 花散りけり。

む……全動詞の未然形 我も行かむ。

口語のただは全動詞の連用形、うは四段、ようはその他の未然形につく。但し、ようがサ變につく時は「しよう」となる。

### 二 受身(可能崇敬)の助動詞

る……四段・ナ變・ラ變の未然形  
父に叱らる。母に死なる。此處に居らる。

らる……右以外の未然形  
犬に吠えらる。馬に蹴らる。よく勉強せらる。

「らる」がサ變につく時「罪せらる」「解釋せらる」となるべきを「罪さる」「解釋さる」となる類は差支ない。

口語のれるは四段、られるは其の他の未然形につく。但し、サ變につく時「缺席せられる」といふべきを「缺席される」といふ類は差支ない。

又可能の場合「書かれる」「行かれる」といふべきを「書ける」「行ける」といふことがある。これ等を可能動詞といふことがある。

### 三 可能の助動詞

べし……ラ變の連體形 かくてあるべしとも思はれず。

可能動詞  
可能の助動詞



使役(崇敬)の助動詞

右以外の終止形  
べかり：同前

女も登るべし。  
かくてあるべかりしが。  
我也參加すべかりしに。

四 使役(崇敬)の助動詞

す……………四段ナ變ラ變の未然形

舟を漕がす。  
母君死なせ給ふ。

恙なくあらせらる。

さす……………右以外の未然形

弓を射さす。  
木を植ゑさす。

さすがサ變につく時「手習せさす」「賣買せさす」となるべきを「手習さす」「賣買さす」となる類は差支ない。

しむ……………全動詞の未然形

競争せしむ。

「得しむ」といふべきを「得せしむ」といふことは差支ない。

口語のせるは四段させるはその他の未然形につく。但し、サ變につく時「掃除せさせる」のやうにいふべきを「掃除させる」のやうにいふのが普通である。

五 崇敬の助動詞 受身使役の條参照。

口語のますは全動詞の連用形につく。

六 推量の助動詞

らむ……………ラ變の連體形

右以外の終止形

何れの處にてあるらむ。  
物思ふらむ。

らし……………同前

家有るらし。  
紅葉散るらし。

べし……………同前

かゝる事もあるべし。



めり……同前

明日も雨降るべし。  
かくこそ侍るめれ。  
雨降るめり。

けむ……全動詞の連用形

いづち行きけむ。

まし……全動詞の未然形

春の心は長閑けからまし。

打消の助動詞

七 打消の助動詞

ず……全動詞の未然形

未だ消えず。

ざり……同前

全く知らざりき。

じ……同前

未だ知らじ。

まじ……ラ變の連體形

かゝる事は有るまじ。

右以外の終止形

遽かには來まじ。

指定の助動詞

八 指定の助動詞

口語ではぬないは全動詞の未然形但し有るにはつかずサ變につく時はせぬしない、まいは四段の終止形その他の未然形につく。  
(サ變につく時はしまい)

なり……全動詞の連體形

月出づるなり。

たり……體言にだけつく

稀に見る才媛たり。

口語のたですは全動詞の連體形につくが此の場合のたのたですとなる事は既に述べた通りである。

九 咏嘆の助動詞

なり……ラ變の連體形

かくこそ今は侍るなれ。

右以外の終止形

蟲の聲すなり。

けり……全動詞の連用形

道はありけり。



願望の助動詞

一〇 願望の助動詞

たし……全動詞の連用形

運動會を見たし。

まほし……全動詞の未然形

早く知らまほし。

口語のたいは全動詞の連用形につく。

一一 比況の助動詞

如し……全動詞の連體形及び體言 水の流るゝ(が)如し。

鬢髮霜の如し。

如しは活用語に續く時は、多く助詞がを挟み體言に續く時は必ず助詞のを挟むことは前に述べた通りである。

口語のやうだやうですやうであるは全動詞の連體形につく。

助動詞相互の接續

助動詞相互の接續は、大體動詞と助動詞との接續に準じて知る

ことが出来る。即ち、動詞の未然形につく助動詞は、助動詞にも未然形につき、その他、連用形・終止形・連體形等につく場合も同様である。

師を擇びて、學ばしめらるべし。

又、べし・べかり・らむらしめり・まじなり(咏嘆)等のやうに、動詞のラ變に限り連體形につき、その他には終止形につくものは、ラ變に似た活用の助動詞にはやはり連體形につき、その他の助動詞には終止形につく。

明日は晴天なるべし。  
かゝる事もありぬべし。  
大いに努力せざるべからず。  
子供には飲ましむべからず。



練習

一、助動詞を動詞の未然形連用形終止形連體形已然形につくものに分類して表を作りなさい。

二、次の文中から助動詞を選び出し、其の種類及び接續について述べなさい。

- (1) 勝海舟若き頃西洋式の兵術を學びしが常に良書の得難きを歎せり。
- (2) 當時書生の身分なれば五十兩の金は直ちに得らるべくもあらず。
- (3) 枯れたる木に花を咲かせたる例もあり。
- (4) 學淺くとも其の注意だに深くば旅はなかく興多くして、しかも少なからぬ利益を得んこと疑あるべからず。

- (5) 行幸餘りに遅かりしかば人をしてうかゞはしむるに、播磨の今宿といふ處より山陰道にかゝり給ひし由なり。
- (6) 青葉のしげれる枝に眞青の梅の實の珠をなせるうつくしといふにもあらねどすがくし。
- (7) この男は人に物をくれることが嫌ひだつたらしい。
- (8) 大分人が集まつてゐるやうだから私も行つて見よう。
- (9) 今日東京の伯父さんが來られる筈だ。
- (10) 西の空がほんのり明るい。明日は晴かも知れない。

三次の文の誤を正し、其の理由をいひなさい。

- (1) 此の品物に手を觸るべからず。
- (2) かゝる行ひは學生のせまじきことなり。



- (3) 彼方の山の朧ろなるは霞の之を隔つなり。  
（これは隔つて見ゆ）
- (4) 汽車に注意するべし。  
（注意するべし）
- (5) 遠き道をも厭はずしてかゝる田舎に來き。  
（遠くは嫌はず）
- (6) 雷にうたれて死にぬ。  
（雷に打たれて死ぬ）
- (7) そんなことは恐らく言うまい。  
（そんなことは恐らく言はず）
- (8) 君も行き給へ僕も行こう。  
（君も行くが、僕も行く）
- (9) とてもだめだらうが、もう一度やつてみやう。  
（とても駄目だが、もう一度やってみよう）
- (10) 手放し難い用事があるから誰かに立案ささう。  
（手放し難い用事があるから誰かに立案させよう）
- (11) 眞剣でない生活には何の價値があるふか。  
（真剣でない生活には何の価値があるか）
- (12) そんな亂暴なことはするまいと思ふがどうだろう。  
（そんな乱暴なことはするまいと思ふがどうだろう）

第一〇章 助詞の用法附係結の法則

助詞は左の用例のやうに種々の語に添うて種々の意をあらはすものであつて文語と口語と用法の同じものもあり、又違ふものもある。

(文語)

は 富士は日本一の名山なり。  
 が 汝が知る處にあらず。  
 梅が香のあたりたゞよふ。  
 努力せしが、かひなかりき。  
 水の流るゝが如し。  
 の 秋風の立つ。

(口語)

富士は日本一の名山である。  
 お前が知つたことではない。  
 梅の香があたりたゞよふ。  
 努力したが、かひがなかつた。  
 水が流れるやうだ。  
 秋風が立つ。



櫻の花咲き出でたり。

光陰矢の如し。

を 山を下だる。

かくまで努力せしものを。

に 努力せしにかひなかりき。

櫻の花が咲いた。  
光陰は矢のやうだ。  
山を下だる。  
これ程努力したのに。  
努力したのに、かひがなかつた。

○東京に行く。

○東京に行く。

○東京へ行く。

へ ○彼方へ行く。

○あちらへ行く。

右の○印の例のやうに、文語ではには場所を、へは方向を示す場合に使はれるが、口語では混同して使はれる。

と 花子といふ子あり。

友人と散歩す。

智と勇(と)を兼ね。

も 野も山も花盛りなり。

努力したるも失敗せり。

より 隣國より來る。

金は銀より貴し。

まで 大阪まで同行すべし。

にて ペンにて書く。

ば ○雨降れば行くまじ。

○雨降れば行かず。

花子といふ子がある。  
友人と散歩する。  
智と勇(と)を兼ねてゐる。  
野も山も花盛りである。  
努力したけれども、失敗した。  
隣國から來た。  
金は銀より貴い。  
大阪まで同行しよう。  
ペンで書く。  
○雨が降れば行くまい。  
○雨が降るから行かない。  
○雨が降るので行かない。



右の○印の例のやうに、文語ではばが活用語の未然形につけば假定の條件をあらはし、已然形につけば既定の條件をあらはすが、口語ではばが已然形について假定の條件をあらはし、既定の條件をあらはすには、別にからのので等を使ふ。

とも 行くととも、及ばじ。

死すとも、背かじ。

ど 風強けれど、舟ゆれず。

行つても、間にあふまい。

死んでも、背くまい。

風が強いけれど、舟はゆれな

い。

風が強いけれども、舟はゆれ

ない。

風が強いが、舟はゆれない。

吹くけれども、消えない。

ども 吹けども、消えず。

つゝ 涙を流しつゝ語る。

て 我も行きて見ん。

だに ○禽獸にだに若かず。

すら ○禽獸すら恩を知る。

さへ ○道險しく、雨さへ降る。

吹くけれども、消えない。

吹くが、消えない。

涙を流しながら語る。

私も行つて見よう。

○禽獸にさへ及ばない。

○禽獸さへ恩を知つてゐる。

○道が險しく、雨までが降る。

道が險しく、雨までが降る。

右の○印の例のやうに、文語ではだにすらは軽いものを擧げて重いものを言外に含め、さへはあるが上に更に加はる意をあらはしてゐるが、口語ではさへが何れにも使はれる。



のみ 親の事のみ思ふ。

ばかり かくばかり善きはあ

らじ

かな 朗かなる月かな。

ばや 我也行かばや。

な 急ぎて過ちすな。

よ その悲しさよ。

風よ吹けく。

ぞ 我也人ぞ。

○花ぞ散りける。

なむ 世の汚れをば知らであ

らなむ。

親の事ばかり思ふ。

これほど善いのはあるまい。

朗かな月だねえ。(なあ)

私も行きたいものだ。

急いで過ちするな。

その悲しいことよ。

風よ吹けく。

私も人間だぞ。

花は散つてしまつたのだ。

世の汚れは知らないでゐてほ  
いものだ。

○母なむ知れる。

や あな勇ましや。

豈我のみならんや。

果して其の人なりや。

○花や散りし。

か 如何にすべきか。

○誰にか與ふべき。

○誰かこれを知らざる。

こそ ○よくこそ來給ひつれ。

母が知つてゐるのだ。

あゝ、勇ましいねえ。(なあ)

どうして自分だけであらう

か。

果して其の人であらうか。

花は散つたらうか。

どうしたらよからうか。

誰に與へたらよからうか。

誰がこれを知らないであら

うか。

ようこそお出でになりました。



係結の法則

右の○印の例のやうに、文語ではぞ・なむ・や・かが文の途中に来る時は、それに應ずる結びは連體形となり、こそが文の途中に来る時は、それに應ずる結びは已然形となる。此の法則を係結の法則といふ。

但し、その文が接續の助詞によつて下に續けられる場合は、係結の法則は消えて、その助詞の接續の法則に従ふ。

なさけある人とぞ聞ゆれば……  
時鳥一聲とこそ思ひしに……

練習

一、次の文中から助詞を選び出しなさい。

- (1) 君に知らせ奉らばや。

- (2) 繪にかくとも筆も及ぶまじ。
- (3) 雨だに降らずば行くべし。
- (4) 波風の靜かなる日も舟人はかちに心を許さざらなむ。
- (5) 淺緑すみわたたりたる大空のひろきをおのが心ともがな。
- (6) 打ち寄する波の音さへ何事をか語るに似たり。
- (7) 水の中は冷たいけれども、上がるとなほ寒い。
- (8) 泣いても笑つても、もはや仕方がない。
- (9) 随分勉強したのに合格出来なかつた。
- (10) 空には星ばかりきらめいてゐる。

二次の文の係結について述べなさい。

- (1) 君をおきてはた誰をか頼むべき。



- (2) 煙たなびくとまやこそわがなつかしき住家なれ。
- (3) 緑なる一つ草とぞ春は見し、秋はいろくの花にぞありける。
- (4) ほどく心に心を盡くす國民の力ぞやがてわが力なる。

三、次の文中○のところ、に適當な語を補ひなさい。

- (1) 明日は天氣悪しく○出發せん。
- (2) 暗き○早や起き出づる人あり。
- (3) 行末のことを思へば○やかましくいつたのだ。
- (4) 雨が降るのに風○吹く。
- (5) その位のことには誰に○出来る。
- (6) いたづらする○叱られるのだ。
- (7) これを机の上○おいて下さい。
- (8) 暑い○何も出来ない。

接頭語

接頭語

第一章 接頭語・接尾語

單獨には使はれないで、他の語の上について熟語となる語を接頭語といふ。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |  |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|--|
| う | ひ | 陣 | お | 庭 | す | 足 | ひ | が | 目 | ま | 心 | を | 田 |   |   |   |  |
| た | 走 | る | ほ | の | 見 | ゆ | い | や | 増 | す | さ | 迷 | ふ | か | 弱 | し |  |
| け | 高 | し | な | ま | や | さ | し | も | の | 寂 | し | た | 易 | し |   |   |  |
| 又 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |  |
| う | ち | 出 | づ | さ | し | 出 | す | ひ | き | 受 | く |   |   |   |   |   |  |

右のうちさしひき等は本來動詞であるが、その本の意を失つて接頭語となつたものである。



接尾語

接尾語

單獨には使はれないで、他の語の下について熟語となる語を接尾語といふ。

|      |       |      |      |     |
|------|-------|------|------|-----|
| 子ども  | 彼ら    | 君たち  | 奴ばら  | 君がた |
| 長さ   | 嬉しさ   | 厚み   | 重げ   |     |
| 春めく  | 黄ばむ   | 嬉しがる | 上品ぶる |     |
| 露けし  | 男らし   | 馬鹿らし |      |     |
| 夜すがら | 花見がてら | 少しづつ |      |     |

練習

一次の文を品詞に分けなさい。

- (1) 生物の聲全く絶えて、たゞ我が砂を踏む足音のみ高く響く。
- (2) 京鎌倉ではそろ／＼櫻の咲かうといふ三月の初めであるのに、北風荒き北海の孤島ではちら／＼雪が降る。

二次の文中から活用する品詞を選び出し、其の品詞名と活用とをいひなさい。

- (1) よきをとりあしきをしてとつ國に劣らぬ國となすよしもがな。
- (2) 花に誘はれて佛に詣で、佛に導かれて花を観る客、清水觀音の堂前に満ちたり。舞臺の上より見下ろす人、舞臺の下より咲き誇る花、恰も一幅の畫の如し。

三次の語に讀假名と送假名とをつけなさい。

鑄射堪報用榮植据教衰恥越率居



第三篇 文章 篇

はがもり

第一章 文の成分

主語 述語

主語述語

- 一 犬 走る。
- 二 山 高し。
- 三 清少納言は 才女なり。
- 四 楓も 散りぬ。

右の文で、犬・山・清少納言・楓は其の文の主體をなす語であるから、これを主語といひ、走る・高し・才女なり・散りぬは主語についてその動作状態・性質等を敘述する語であるから、これを述語といふ。主語は普通體言から成り、單獨にあらはれる場合と助詞はもがの

等を伴なふ場合とある。

但し、時として左例のやうに體言に準ずべき語から成ることもある。

- 一 海上平穩なるは、何よりの幸ひなり。
- 二 速かにするのみが、尊きにあらず。

述語は普通用言又は用言に助動詞・助詞の添うたものから成る。但し、時としては、左例のやうに體言又は體言に準ずべき語に助動詞の添うたものから成ることもある。

- 一 東京は 日本の首府なり。
- 二 歲月 流るゝが如し。

主語・述語は文の主成分であつて、普通これが備はらねば完全な文とはいへない。



補語

補語

- 一 猫鼠を捕らふ。
- 二 父東京に行かる。
- 三 頼朝幕府を鎌倉に開く。
- 四 明治天皇江戸城を皇居と定め給ふ。

右の例で、傍線を施した語は、各、其の述語の目的をあらはし、又は述語の意味を助けて其の働きを完全にする。かやうな語を補語といふ。

補語は體言又は體言に準ずべき語から成り、必ず助詞をに、と等を伴なふ。

補語は、述語の性質によつて必ず無ければならぬ場合と、無くてもよい場合とがある。

修飾語

修飾語

- 一 美しくしき鳥、ほがらかに啼く。
- 二 秀吉、壯大なる居城を、交通便利なる大阪に、築く。
- 三 山のやうな波が、切り立つた岩壁に、勇ましく碎ける。

右の例で、傍線を施した語は、各、主語・述語又は補語を修飾してゐる語である。かやうな語を修飾語といふ。

主語・補語の修飾語は直接其の上につくが、述語の修飾語は他語を隔てて修飾する場合がある。

- 一 彼は、深更まで、文を書き續く。
- 二 突然、濃霧が一行を包んだ。
- 三 全く、私は残念に思ひます。



右のやうな場合は修飾語は其の下全部を修飾してゐるものと見てよい。

獨立語

獨立語

一 花子や、お前もお出で。  
 二 あはや子供等は諸共に河に落ち入らんとす。  
 三 雨ははげしく、且つ空はくらし。

右の例で、傍線を施した語は、主語・述語・補語又は修飾語の何れにも屬せぬものである。かやうな語を獨立語といふ。

練習

次の文の主語・述語・補語・修飾語・獨立語を示し、修飾語はどの語を修飾するかをいひなさい。

- (1) 微雨はらくらくと降り出でぬ。
- (2) 燃えさかる火は濡れたる物を忽ちに乾かす。
- (3) 庭の梅花、いち早く咲き出でぬ。
- (4) 國旗は實に國家を代表する標識なり。
- (5) 朝日がきら／＼と室を照らしてゐる。
- (6) あゝ面白かつた。おや、北斗七星が半分杉林にかくれた。
- (7) 生徒は蜘蛛の子を散らしたやうに散つた。
- (8) 雪子、お前も随分よく勉強したねえ。
- (9) 高橋さんの熱心な話は團員に強い感動を與へた。
- (10) たまに散る落葉の音が、がさり／＼と聞える。
- (11) 選手は皆樺色のユニホームを着てゐた。
- (12) 彼の女は壁にかゝつてゐる鏡に向かつてゐた。



正常の場合

第二章 文の成分の位置及び省略

一 正常の場合

一 美しくしき花 はらくと散る。

二 偉大なる飛行船は 廣漠たる平野の空を 悠々と飛ぶ。

右の例でわかるやうに、文の成分の正常な位置は次の通りである。

一 (修飾語)主語……(修飾語)述語。

二 (修飾語)主語……(修飾語)補語……(修飾語)述語。

但し、述語の修飾語は時に補語又は主語の上に来ることは、前章で説いた通りである。

倒置の場合

二 倒置の場合

一 善いかな、言や。

二 かゝる善言を 誰か信ぜざらん。

三 私の机の上に ペンが ある筈です。

四 ありませんね、そんな物は。

右は語調を整へ、又は語勢を強める爲に文の成分の位置を變へたものである。

三 省略の場合

(イ) 主語の省略

一 (人々) 此の處に塵芥を棄つべからず。

二 (私は) 明日お訪ねいたします。

(ロ) 述語の省略



- (ロ) 一 千里の道も一步より。(始まる)
- 二 あなたは、どちらへ。(いらつじやいますか)

(ハ) 補語の省略

- 一 神よ、願はくは(我を)助け給へ。
- 二 皆が其の本を買ひましたから、私も(その本を)買ひました。

(ニ) 其他一部分の省略

- 一 樂は苦の種(なり)、苦は樂の種(なり)。
- 二 私の父は酒(を)も煙草(を)も飲みません。
- 三 私はそんな事(を)は知りません。

右の例のやうに文は冗長を避け、又は意味を強める爲に、其の成分を省略することがある。

練習

次の文中省略されたものは補ひ、倒置されたものは正しい位置になほしなさい。

- (1) よき日は明けぬ、さわやかに。
- (2) 我ははげまん、今日の業。
- (3) 鶯の宿はと問はばいかゞこたへん。
- (4) 顔を洗つて来てビスケットを食べた。
- (5) 今日は日本晴のよい天気。
- (6) 何をあなたは見てゐるのです。
- (7) 走る、火消しが。
- (8) 三人は「どうかもう一曲。」としきりに頼んだ。



單文

第三章 文の種類

單文

一 鳥啼く。

二 巡査 賊を 追ふ。

三 商業は 之に従事する商人だけを利する爲のもてはない。

右の例のやうに、主語と述語との關係が一通りであつて、一文の中に他の文が含まれることのないものを單文といふ。

一 正成と義貞とは 建武中興の功臣なり。

二 私は 鉛筆とペンとノートを 買ひました。

三 少女は 且つ笑ひ且つ泣く。

四 私は 行はうと思つたことを行ひ盡くし、語らうと

思つたことを語り盡くした。

右の例のやうに、主語、述語、補語が幾つも重なつたり、又は補語に述語の添うたものが幾つも重なることがあるが、主語と述語との關係は同種類のものであつて、別種のものではない。これもやはり單文である。

複文

一 空氣の濁れるは、呼吸器に害あり。

二 月明かき夜は、散歩に宜し。

三 日本海は、波高し。

四 鮎は、瀬の早きを喜ぶ。

五 歲月は、水の流るゝが如く、過ぎ去る。



節

從屬節

文主

重文

六 天氣晴朗なれども、波高し。  
 右の例のやうに、一の文が他の文に含まれてゐる場合、其の含まれてゐる文を節といふ。  
 節には右の例でわかるやうに、主語となるもの、述語となるもの、補語となるもの、修飾語となるものがある。かやうに他の文に從屬して其の成分となる節を從屬節といふ。  
 從屬節を含む文を複文といふ。

右の例の(三)のやうに從屬節が述語となつてゐる場合、日本海はといふ全文の主語は特に文主といふことがある。  
 太一郎は、性機敏なり。  
 重文 思ふべきことさうも難い事だ。

一 月明らかに、星稀なり。

對立節

右の例のやうに、二つ以上の節が一文中に含まれ、然も其の各は從屬關係をなすことなく、對立の關係にあるものを對立節といふ。

二 姉は庭を掃き、妹は水を汲む。

三 風雨烈しく、道は暗く、提灯も消えたり。

對立節の相寄つて成る文を重文といふ。

練習

次の文の種類をいひ、其の構造を説明しなさい。

(1) 蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩また吟す。

(2) 桜が始めてかの人を知りし時、彼の人には京都に居たりき。

(3) 霜は、色うるはしく、木々の梢を染め出だせり。



複 單  
 (4) 月影のさなみにくだけ、漁火の波間に出没する夜景も、亦一段の趣あり。  
 (5) 涼しい風がそよ／＼と吹いて来る。  
 (6) さま／＼の馬が元氣よくかけまはつてゐる様は實に勇ましい。  
 (7) いつか夕方の色が四方にたゞよつて向かふの山も薄墨色にくれてゆく。  
 (8) 山の裾の方があちらこちら白いのは蕎麥の花であらう。

訂改 女子國文典終

附録 文法上許容ニ關スル事項

- 一 「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ。
- 二 「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。
- 三 過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ。  
例 火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ。  
金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ。
- 四 「コトナリ」「異」ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ。
- 五 「、セサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。  
例 手習サス。  
周旋サス。  
賣買サス。
- 六 「、セラル」トイフベキ場合ニ「、サル」ト用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨



例 罪サル。

評サル。

解釋サル。

七 「得シム」下イフベキ場合ニ「得セシム」下用キルモ妨ナシ。

例 最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。

主下貴賤ノ別ナク各其ノ地位ニ安シズルコトヲ得セシムベシ。

八 佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シシカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイ

ラベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ。

例 唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。

九 「てに」をば「ノ」ハ動詞助動詞ノ連體言ヲ受ケテ連續スルモ妨ナシ。

例 花ヲ見ルノ記。

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

二 市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ。

〇 疑ノてにをば「ノ」ハ動詞形容詞助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ。

例 有ルヤ。

二 面白キヤ。

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ。

二 てにをば「ト」モノ動詞使役ノ助動詞及ビ受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習

慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セラレトモ。

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

三 てにをば「ト」ノ動詞使役ノ助動詞受身ノ助動詞及ビ時ノ助動詞ノ連體言ニ

三 連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 月出ヅルヲ見エテ。

嘲弄セズルヲ思ヒテ。



終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。  
萬人皆其徳ヲ稱ヘケルトゾ。

三 語句ヲ列舉スル場合ニ用キルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限り最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

例 月ト花。

宗教ト道德ノ關係。

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例。

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ。  
史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ。

四 上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

例 誰ニヤ問ハン。

幾何ナルヤ。  
如何ナル故ニヤ。

五 如何ニスベキヤ。

てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用キルモ妨ナシ。

例 何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ。

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ。

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。

誤解ヲ生ズベキ例。

請願書ハ會議ニ附スルモ(ストモ)之ヲ朗讀セズ。

給金ハ低キモ(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ。

六 「トイフ」「トイフ語ノ代リニ」ナルヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 イハユル哺乳獸ナルモノ。

顔回ナルモノアリ。



口語

| 詞容形語口 |     |         | 四段             | 種類       |
|-------|-----|---------|----------------|----------|
| 表     | 用   | 活       |                |          |
| シク活用  | ク活用 | 種類      | 有 死 書          | 語幹 / 語尾  |
| 樂     | 高   | 語幹 / 語尾 | ら な か          | 未然       |
|       |     | 未然      | り に き          | 連用       |
| シク    | ク   | 連用      | る ぬ く          | 終止       |
| しい    | い   | 終止      | る ぬ く          | 連體       |
| しい    | い   | 連體      | れ ね け          | 已然       |
| しけれ   | けれ  | 已然      | れ ね け          | 命令       |
|       |     | 命令      | ラ ナ 四<br>變 變 段 | デ文<br>ハ語 |

口語の用法は、文法書に於ては、  
 一、口語の體裁は、文法書に於ては、  
 二、口語の體裁は、文法書に於ては、  
 三、口語の體裁は、文法書に於ては、  
 四、口語の體裁は、文法書に於ては、  
 五、口語の體裁は、文法書に於ては、  
 六、口語の體裁は、文法書に於ては、  
 七、口語の體裁は、文法書に於ては、  
 八、口語の體裁は、文法書に於ては、  
 九、口語の體裁は、文法書に於ては、  
 十、口語の體裁は、文法書に於ては、



語口

|                |          |
|----------------|----------|
| 四<br>段         | 種<br>類   |
| 有 死 書          | 語幹/語尾    |
| ら な か          | 未<br>然   |
| り に き          | 連<br>用   |
| る ぬ く          | 終<br>止   |
| る ぬ く          | 連<br>體   |
| れ ね け          | 已<br>然   |
| れ ね け          | 命<br>令   |
| ラ ナ 四<br>變 變 段 | デ文<br>ハ語 |

表用活詞動語文

|   |   |     |     |             |             |             |             |        |        |
|---|---|-----|-----|-------------|-------------|-------------|-------------|--------|--------|
| ラ | ナ | サ   | カ   | 下<br>一<br>段 | 下<br>二<br>段 | 上<br>一<br>段 | 上<br>二<br>段 | 四<br>段 | 種<br>類 |
| 有 | 死 | (爲) | (來) | (蹴)         | 棄           | (射)         | 起           | 書      | 語幹/語尾  |
| ら | な | せ   | こ   | け           | て           | い           | き           | か      | 未<br>然 |
| り | に | し   | き   | け           | て           | い           | き           | き      | 連<br>用 |
| り | ぬ | す   | く   | け           | つ           | い           | く           | く      | 終<br>止 |
| る | ぬ | す   | く   | け           | つ           | い           | く           | く      | 連<br>體 |
| れ | ぬ | す   | く   | け           | つ           | い           | く           | け      | 已<br>然 |
| れ | ね | せ   | こ   | け           | て           | い           | き           | け      | 命<br>令 |
| ら | な | サ   | カ   | 下<br>一<br>段 | 下<br>二<br>段 | 上<br>一<br>段 | 上<br>二<br>段 | 四<br>段 | 種<br>類 |



表用活詞動語口

| サ<br>變   | カ<br>變 | 下<br>一<br>段 | 上<br>一<br>段 | 四<br>段         | 種<br>類   |
|----------|--------|-------------|-------------|----------------|----------|
| (爲)      | (來)    | (蹴 棄)       | (射 起)       | 有 死 書          | 語幹 / 語尾  |
| しせ       | こ      | けて          | いき          | ら な か          | 未 然      |
| し        | き      | けて          | いき          | り に き          | 連 用      |
| す<br>る   | く<br>る | けて<br>る     | いき<br>る     | る ぬ く          | 終 止      |
| す<br>る   | く<br>る | けて<br>る     | いき<br>る     | る ぬ く          | 連 體      |
| す<br>れ   | く<br>れ | けて<br>れ     | いき<br>れ     | れ ね け          | 已 然      |
| しせ<br>ろよ | こ<br>い | けてて<br>ろよろよ | いきき<br>ろよろよ | れ ね け          | 命 令      |
| サ<br>變   | カ<br>變 | 下<br>一<br>段 | 上<br>一<br>段 | ラ ナ 四<br>變 變 段 | デ文<br>ハ語 |

表用活詞動語

| ラ<br>變 | ナ<br>變 | サ<br>變 | カ<br>變 | 下<br>一<br>段 | 下<br>二<br>段 | 上<br>一<br>段 |
|--------|--------|--------|--------|-------------|-------------|-------------|
| 有      | 死      | (爲)    | (來)    | (蹴 棄)       | 棄           | (射)         |
| ら      | な      | せ      | こ      | けて          | て           | い           |
| り      | に      | し      | き      | けて          | て           | い           |
| り      | ぬ      | す      | く      | ける          | つ           | い           |
| る      | ぬ      | す      | く      | ける          | つ           | い           |
| れ      | ぬ      | す      | く      | ける          | つ           | い           |
| れ      | ね      | せ      | こ      | ける          | て           | い           |

| 詞容形語口   |        |         |
|---------|--------|---------|
| 表 用 活   |        |         |
| シク活用    | ク活用    | 種 類     |
| 樂       | 高      | 語幹 / 語尾 |
|         |        | 未 然     |
| し<br>く  | く<br>く | 連 用     |
| し<br>い  | い      | 終 止     |
| し<br>い  | い      | 連 體     |
| し<br>けれ | け<br>れ | 已 然     |
|         |        | 命 令     |

| 詞容形語文   |        |         |
|---------|--------|---------|
| 表 用 活   |        |         |
| シク活用    | ク活用    | 種 類     |
| 樂       | 高      | 語幹 / 語尾 |
| し<br>く  | く      | 未 然     |
| し<br>く  | く      | 連 用     |
| し<br>し  | し      | 終 止     |
| し<br>き  | き      | 連 體     |
| し<br>けれ | け<br>れ | 已 然     |
|         |        | 命 令     |



天用番 詞 動 助 語

|   |    | (使役) |    |
|---|----|------|----|
|   |    | 崇    | 敬  |
| ら | し  | さ    | す  |
| む | む  | す    |    |
|   | し  | さ    | せ  |
|   | め  | せ    |    |
|   | し  | さ    | せ  |
|   | め  | せ    |    |
| ら | し  | さ    | す  |
| む | む  | す    |    |
| ら | し  | さ    | する |
| む | むる | する   |    |
| ら | し  | さ    | すれ |
| め | むれ | すれ   |    |
|   | し  | さ    | せよ |
|   | め  | せよ   |    |



文語助動詞活用

| 推量 |    |    |   | (崇敬) |     |    | 可能 |    |    |   | (受身) |    | 時  |    |   |    |   |   | 種類 |     |
|----|----|----|---|------|-----|----|----|----|----|---|------|----|----|----|---|----|---|---|----|-----|
|    |    |    |   |      |     |    |    |    |    |   |      |    | 未來 | 過去 |   | 完了 |   |   |    |     |
| め  | べ  | ら  | ら | し    | さ   | す  | べ  | べ  | ら  | ら | ら    | る  | む  | け  | き | り  | た | ぬ | つ  | 語活用 |
| り  | し  | し  | む | む    | す   |    | かり | し  | る  | る | る    |    |    | り  |   |    | り |   |    |     |
|    | べ  |    |   | し    | さ   | せ  | べ  | べ  | ら  | ら | れ    | れ  |    |    |   |    | た | な | て  | 未然  |
|    | く  |    |   | め    | せ   |    | から | く  | れ  | れ | れ    |    |    |    |   |    | ら |   |    |     |
|    | べ  | ら  |   | し    | さ   | せ  | べ  | べ  | ら  | ら | れ    | れ  |    |    |   |    | た | に | て  | 連用  |
|    | く  | しく |   | め    | せ   |    | かり | く  | れ  | れ | れ    |    |    |    |   |    | り |   |    |     |
| め  | べ  | ら  | ら | し    | さ   | す  |    | べ  | ら  | ら | る    | る  | む  | け  | き | り  | た | ぬ | つ  | 終止  |
| り  | し  | し  | む | む    | す   |    |    | し  | る  | る | る    |    |    | り  |   |    | り |   |    |     |
| め  | べ  | ら  | ら | し    | さ   | す  |    | べ  | ら  | ら | る    | る  | む  | け  | し | る  | た | ぬ | つ  | 連體  |
| る  | き  | し  | む | む    | する  |    |    | き  | る  | る | る    |    |    | る  |   |    | る |   |    |     |
| め  | べ  | ら  | ら | し    | さ   | す  |    | べ  | ら  | ら | る    | る  | め  | け  | し |    | た | ぬ | つ  | 已然  |
| れ  | けれ | め  | め | むれ   | すれ  |    |    | けれ | るれ | れ | るれ   |    |    | れ  | か |    | れ | れ | れ  |     |
|    |    |    |   | しめよ  | させよ | せよ |    |    |    |   | られよ  | れよ |    |    |   |    |   | ね | てよ | 命令  |



表用活詞動助語文

| 比況 | 願望    |     | 咏嘆 |    | 指定 |    | 打消   |   |    | 推量 |     |    |    |     | 使役<br>(崇敬) |    |     | 可能  |    |     | 受身<br>(崇敬) |     | 時  |     |    | 種類 |    |    |     |     |    |    |
|----|-------|-----|----|----|----|----|------|---|----|----|-----|----|----|-----|------------|----|-----|-----|----|-----|------------|-----|----|-----|----|----|----|----|-----|-----|----|----|
|    | まほし   | たし  | けり | なり | たり | なり | まじ   | じ | ざり | す  | まし  | けむ | めり | べし  | らし         | らむ | しむ  | さす  | す  | べかり | べし         | らる  | る  | らる  | る  |    | む  | けり | きり  | たりぬ | つ  |    |
| 如し | まほし   | たし  | けり | なり | たり | なり | まじ   | じ | ざり | す  | まし  | けむ | めり | べし  | らし         | らむ | しむ  | さす  | す  | べかり | べし         | らる  | る  | らる  | る  | む  | けり | きり | たりぬ | つ   | 活用 |    |
| 如く | まほしく  | たく  |    |    | たら | なら | まじく  |   | ざら | す  |     |    |    | べく  |            |    | しめ  | させ  | せ  | べから | べく         | られ  | れ  | られ  | れ  |    |    |    | たら  | な   | て  | 未然 |
| 如く | まほしく  | たく  |    |    | たり | なり | まじく  |   | ざり | す  |     |    |    | べく  | らしく        |    | しめ  | させ  | せ  | べかり | べく         | られ  | れ  | られ  | れ  |    |    |    | たり  | に   | て  | 連用 |
| 如し | まほし   | たし  | けり | なり | たり | なり | まじ   | じ | ざり | す  | まし  | けむ | めり | べし  | らし         | らむ | しむ  | さす  | す  |     | べし         | らる  | る  | らる  | る  | む  | けり | きり | たりぬ | つ   | 終止 |    |
| 如き | まほしき  | たき  | ける | なる | たる | なる | まじき  | じ | ざる | ぬ  | まし  | けむ | めり | べき  | らしき        | らむ | しむる | さする | する |     | べき         | らるる | る  | らるる | る  | む  | ける | し  | たるぬ | つる  | 連體 |    |
|    | まほしけれ | たけれ | けれ | なれ | たれ | なれ | まじけれ | じ | ざれ | ね  | ましか | けめ | めれ | べけれ |            | らめ | しむれ | さすれ | すれ |     | べけれ        | らるれ | るれ | らるれ | るれ | め  | けれ | しか | たれぬ | つれ  | 已然 |    |
|    |       |     |    |    | たれ |    |      |   | ざれ |    |     |    |    |     |            |    | しめよ | させよ | せよ |     |            |     |    |     |    |    |    |    |     | たれぬ | てよ | 命令 |



動詞活用表

| 願望        | 指定 |    | 打消 |     |     | 推量           | 崇敬  | 使役  |    |
|-----------|----|----|----|-----|-----|--------------|-----|-----|----|
|           | で  | だ  | ま  | ない  | ぬ   |              |     | さ   | せ  |
| たい        | です | だい | まい | ない  | ぬ   | らしい          | ます  | させる | せる |
|           | で  | だら |    |     |     |              | ませ  | させ  | せ  |
| た<br>(たく) | で  | だつ |    | なく  | す   | らしく<br>(らしく) | まし  | させ  | せ  |
| たい        | です | だい | まい | ない  | (ぬ) | らしい          | ます  | させる | せる |
| たい        |    |    |    | ない  | (ぬ) | らしい          | ます  | させる | せる |
| たけれ       |    |    |    | なけれ | ね   |              | ますれ | させれ | せれ |
|           |    |    |    |     |     |              | ませ  | させよ | せよ |



口語助動詞活用表

| 願望   | 指定 |    | 打消 |     |       | 推量  | 崇敬  | 使役  | (崇敬能) |     | 受身 |      | 時   |    |     | 種類 |    |
|------|----|----|----|-----|-------|-----|-----|-----|-------|-----|----|------|-----|----|-----|----|----|
|      |    |    |    |     |       |     |     |     |       |     |    |      | 未來  | 過去 | 語活用 |    |    |
| たい   | で  | だ  | まい | ない  | ぬ     | らしい | ます  | させる | せる    | られる | れる | られる  | れる  | よう | う   | た  | 未然 |
|      | で  | だら |    |     |       |     | ませ  | させ  | せ     | られ  | れ  | られ   | れ   |    |     | たら | 連用 |
| (たく) | で  | だつ | なく | す   | (らしう) | まし  | させ  | せ   | られ    | れ   | られ | れ    |     |    |     | たり | 終止 |
| たい   | です | だ  | まい | ない  | (ぬ)   | らしい | ます  | させる | せる    | られる | れる | られる  | れる  | よう | う   | た  | 連體 |
| たい   |    |    |    | ない  | (ぬ)   | らしい | ます  | させる | せる    | られる | れる | られる  | れる  |    |     | た  | 已然 |
| たけれ  |    |    |    | なけれ | ね     |     | ますれ | させれ | せれ    | られれ | れれ | られれ  | れれ  |    |     |    | 命令 |
|      |    |    |    |     |       |     | ませ  | させろ | せろよ   |     |    | られろよ | れろよ |    |     |    |    |



文部省檢定濟

高等女子學校國語科 昭和八年十二月二日

發行所  
發賣所  
發賣所

東京市赤坂區新坂町六十八番地  
大阪市西區立賣堀南通三丁目  
振替口座大阪八六〇四五番  
大阪市東區北久太郎町四丁目  
振替口座大阪二三一一番  
東京市日本橋區數寄屋町七番地

京極書店  
柳原書店  
林平書店



印發  
刷行  
者兼

京極喜太郎

著  
者

國語漢文研究會

廣島高等師範學校附屬中學校

大阪西區立賣堀南通三丁目二十一番地

昭和八年六月十日印  
昭和八年六月十三日發  
昭和八年十一月十五日訂正再版印刷  
昭和八年十一月十八日訂正再版發行

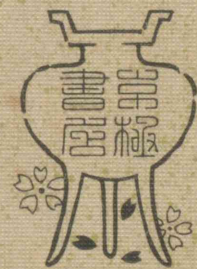
訂改女子國文典 全

定價金五拾六錢









広島大学図書

2000035400

